



第二の人生は 日本語ボランティア

—みんな地球人—



青木 優子

和歌山日本語教育研究会代表

【あおき・ゆうこ】

1973年4月和歌山市役所入庁。2007年3月末退職。和歌山県国際交流協会において「もっと日本語クラス」を開講するなど外国人のための日本語学習支援ボランティア活動を始めて8年が経過。

第二の人生のスタート

2007年4月1日、1年前には思ってもみなかった新しい人生のスタートの日となった。前日、私は34年間勤務してきた和歌山市役所を退職したのである。

前年7月に倒れた夫の母の介護と仕事の両立が難しくなったことが主な理由であった。それまで私は中途退職するなんて考えもしなかったので、辞めると決めるまではとても悩んだ。しかし、決断したら前を見ろしかない。人生どこでどう変わるかわからないものである。こうなったら、第二の人生を有意義に過ごしたいと考えていた。

退職を決めるまでの1ヶ月

2006年7月の出勤前のこと。91歳になる夫の母が突然倒れた。救急車を呼び、

病院に付き添った。幸い入院はしなくても済んだ。しかし、もともと体が丈夫ではなかったこともあって、その後は介助がないと一人で生活することが難しくなってしまった。

私は結婚後、夫の両親と同居し家事を任された。4代になった頃、進行性の病気にかかった実母も同居することとなり、仕事と家事に加え介護も始まった。仕事はだんだんと責任が重くなる一方、どんどん体力がなくなっていく4代後半になった私は2度の手術入院を経験することとなった。

2003年2月に夫の父が心臓発作で亡くなり、2006年4月には実母も見送った。実母は亡くなる2年ほど前から病院や介護施設でお世話になっていたが、実母の死後、まだ3か月も経たないうちに今度は夫の母が倒れてしまった。

仕事と家事、それに再び介護の生活が始まった。夫も家事を分担してくれた。出勤前に母の身の回りや食事の世話をし、昼食

と夕食は温めればよいように用意し、昼と夕方の1時間ずつヘルパーさんに来てもらって食事の介助をしてもらった。帰宅後は真っ先に母をお風呂に入れ、その後で自分達の食事を作る毎日。仕事が忙しい時期や出張などの場合にはショートステイを利用したが、介護支援サービスを利用するにも基準限度があるため、私達の負担は大きかった。介護休暇を取ることも考えたが介護はいつまで続くか先が見えない。周囲の人が忙しくしているのを見ると、休暇を取りたいとはとても言えなかった。

それまでの私は「何でも頑張ればできる」と思ってきたが、この時はやはり疲れれていても眠れず、葛藤する日々が続いて体調を崩しかけていた。そんな私の肩の力を抜かせてくれたのは夫であった。「頑張らなければ」とばかり思っていた私であったが「そうか。この辺で辞めて別の人生を歩むこともありかな」と思わせてくれた。

昨秋は学習者みんなで書道体験をした



授業の様子

日本語教師との出会い

こうして退職した私は介護中心の生活を始めるようになったが、母がデイサービスで不在の時間には「源氏物語を読む会」や「中国語」などのサークル活動への参加、パン作り、友人とのランチ会など、今までなかった時間を楽しむようになった。しかし、第二の人生の過ごし方としてはもう少し何か「これだ」というものがほしかった。

半年近く経ったある日のこと。「和歌山大学ボランティア日本語教員養成講座開講」という新聞の記事が目にとまった。3か月間で20時間受講すれば留学生に日本語を教えるボランティアができる」と書いてある。「留学生に日本語を教える？ どんな講座だろう？」私はその記事に心惹かれた。

私が留学生の支援に関心を持ったのにはわけがあった。30年ほど前、夫が日中友好のボランティアをしていた頃、和歌山大学の大学院に国費留学してきた中国人男性と知り合い親しくなっており、彼の下宿先で中国語を教える機会があったり、彼もうちで一緒に食事したりするようになった。

私も日本語が堪能な彼と話しているといういろいろ勉強になり刺激を受けた。彼が「僕達は国や政治に

関係なく一人の人間としての付き合いをしてお互いの国の理解を深めている。これが本当の日中友好だね」と言うのを聞いて、世界の平和のためにはこうした一人ひとりの交流が大切なことや、それがお互いの国の理解につながっていくのだということを感じたのであった。

もう一つ心に残ったことがあった。在職中に和歌山大学のE先生に施設の子どもの学習支援をお願いしたことがあった。E先生はお忙しいのに快く引き受けてくださり、ゼミの学生達と一緒に施設の子どもの学習支援をしてくれるようになった。和歌山大学にはこんな素晴らしい先生がいらっしゃるのだなあと感動したのであった。

この二つのことと私の子どもの頃の夢、それは学校の先生になることであつた。家庭の事情で大学に進学せず就職したが、初めての職場が市立幼稚園だったことから先生方の協力を得て通信制大学で幼稚園教諭二級免許を取得することができた。しかし、当時はずっと採用試験がなく、結局教員になる夢は叶わなかった。だから、ボランティア日本語教員にちよつと心がときめいたので。

講座を受講することにした私は養成講座のある土曜の午前中、夫に母の介護を任せて出席した。養成講座では日本語教育の現状や背景、ボランティア日本語教員とは何か、教師としての資質、日本語の文字や表記、音声、特徴、国際理解や異文化学習、教授法や教案の作り方などを学んだが、受

講しているうちに日本語を教えるというのはそう簡単なものではないということがわかってきた。母語としての日本語教育と外国語としての日本語教育は指導法が違うということも知った。日本人だから日本語を教えられると思っていたのは大きな間違いであつた。

養成講座受講後

その年の12月に和歌山大学の養成講座が終わり、翌年1月から中国人留学生で日本語能力が上級レベルのTさんを担当することになった。毎週1回1時間半、文章の添削や新聞記事の読解の指導を続けた。Tさんは熱心で毎週の学習支援を喜んでくれ、家にも遊びに来るようになり、夫も私の日本語ボランティアと一緒に楽しんでくれるようになっていた。

しかし、私は教えれば教えるほど「質問に対して適切に答えられない。自分が使っている言葉の意味を相手が理解できるように説明できない」と自分の指導力のなさを痛感していった。そんな時ある民間の教育機関で「日本語教師養成講座420時間」が翌月の4月から開講されると知り、説明会に行ってみることにした。1年間の講座の費用は高額であったが、講師のプレ授業を聴いているうちに「こんなことを勉強したい」と強く思えてきて、私は退職記念に少しお金を使わせてもらうことにして、そ

の日のうちに申し込みを済ませた。

翌月から1年間のバス通学が始まった。母の世話を済ませ、後のことはまもなく帰宅する夫に任せて家を出る。授業を受けるのはとても楽しく、若い人達にまじって前列の席でノートを取る私の目はきつと輝いていただろうと思う。この頃から、私の中で日本語を教えるための学習や日本語支援のボランティア活動が心の支えになっていった。

そして、420時間を受講修了後は放送大学へ編入し、さらに日本語を教えるための勉強を続けることにした。通信制の大学では幼稚園免許を取得したもののスクーリングに必要な長期休暇を取得するのが難しかったため中退していたので、ちゃんと卒業しておきたかったのである。3年後、「和歌山市における外国語を母語とする児童生徒の日本語学習支援について―その背景と問題点―」というテーマで卒業論文を仕上げ、先生方の前で発表し良い点をいただいで卒業することができた。

「ボランティア日本語教員養成講座」「日本語教師養成講座420時間」「放送大学編入」と勉強を続けてきた私であったが、日本語を教えるための知識は今でも十分ではない。これからも生涯学習とせずと勉強を続けていきたいと思っっている。



日本語ボランティアクラスの 開講

受講者の中には講座終了後、海外で日本

語教師をしようとしている人もいたが、私は地域でのボランティア活動に学んだことを生かしたいと思っっていたので、留学生への日本語支援のほかに和歌山県国際交流協会
でボランティア活動をしようと決めていた。

ところが講座を修了した年の春、それまで続いていた国際交流協会の日本語ボランティアクラスがなくなり、協会事業として初級日本語クラスが開始されることになった。ボランティア登録者の活動は秋から始まるということであったので、私と一緒に受講しボランティア日本語クラスをする仲間達とは時々集まって勉強会をしながら秋を待った。私達の会は日本語を教えるための勉強会をしていたことから「和歌山日本語教育研究会」と名付け、その後もその名前を使っている。

9月に入ってボランティア日本語教師の活動ができるようになった。前年まで協会がコーディネートしてボランティアクラスを開催していたのが自主企画活動となったので、教室を借りるためには企画書を提出し広報も教材作成も何もかも自分達でしなければならなくなった。最初は戸惑ったがそれでもとまかやってみようということになり、私が企画書作成や協会との調整、メンバーへの連絡などを引き受けた。こうして、土日の午前10時半から12時までの2クラスを開講することにして「初級後半レベルボランティア日本語クラス」をスタートさせた。

しかし、土曜日に受講者があまり集まらず週2回の開催は負担が大きいかもあって、2年後からは授業日を日曜だけにし、また指導内容もテキストを使った積み重ね式ではなく、いつから参加してもわかる内容
できるだけ学習者のニーズに合わせた日本語学習ができるように指導内容を見直した。

現在は、初級授業修了程度のレベルの人が学習できるクラスとして「もつと日本語クラス」を日曜日の午前に開き、平日には自宅
で「もつと日本語クラス」に参加できない人や留学生の日本語支援も行っている。



「もつと日本語クラス」のこと

日曜日の午前10時半。現在、和歌山県国際交流センターの「もつと日本語クラス」には、中国、タイ、ベトナム、イギリスなどから仕事や結婚、留学などのために和歌山にやってきた外国人学習者が十数人通ってくる。日本語教師は9人、公務員や小学校の教員、介護福祉士、郵便局員、塾講師などの仕事をしながら、遠い人は車で1時間以上かけてボランティアに来てくれている。授業は1年を前期と後期に分け、学習日と学習項目、行事などを決め、授業の担当日と補助日を割り振り、1人が授業を担当、2〜3人がサポートする体制にしている。

1人で買い物したい、病院で病状の説明をしたい、子どもの学校の連絡に必要な日



学習者たちとのプチ旅行で
「稲村の火の館」を見学

本語を覚えたい、方言がわからないので教えてほしい、敬語を勉強したい、日本の文化を知りたいなどと希望する学習者のニーズにすべて応えることはできないが、できるだけ叶えてあげたいと思つてみんなで教材を工夫し授業を行っている。

4月からの前期クラス。和歌山城でのお花見が第1回の授業である。最近では日本語クラスで学ぶ主婦達も料理を作つて持ち寄ってくれるので、新メンバーの学習者は大喜びである。桜の木の下でお弁当を食べた後は紙芝居やゲームをし、みんなの心がつながっていく。その後も授業の中で日本の行事を紹介する。七夕の笹飾りを作り、防災訓練にも参加、お月見にはお団子のほか中国やベトナムの月餅を食べ、クリスマス

にはみんなでパーティー、新年はそれぞれの国のお正月について発表してもらうなど、できるだけ多くの行事を紹介し体験してもらおうようにしている。

学習者の話に笑わされたり「なるほど」と思わせられたりすることもある。「日本へ来たばかりの頃、ケ

ーキに『生物』つて書いてあるのでびつくりしたよ」と話してくれた中国人女性は「なまもの」を「いきもの」と読んで驚いたのであった。

2013年10月には、私達の活動が「地域に密着した女性を応援しよう」という趣旨でソロプチミスト和歌山からクラブ賞をいただいた。その時いただいた賞金で安政の大地震の時、津波から村人達を救った濱口梧陵の記念館がある広川町の「稲村の火の館」と、醤油発祥の地で昭和の町並みが残る湯浅町を見学することができた。学習者達は地震の経験がない人がほとんどなので防災教育も兼ねての遠足である。日本に来て初めて切符を買つて電車に乗る経験をしたり、初めて見る海に感動したり、見るもの聞くものすべてに目を輝かせていた。

2015年10月、国際交流協会事務局長のご紹介で、書道の先生が書道体験をさせてくださることになった。中国人学習者2人以外は初めて筆を持つ学習者ばかりであったが、ご指導をいただいたおかげですばらしい作品が仕上がった。

今では、国際交流協会職員の方のご協力、地域のボランティアの方との連携により、私達だけではできないことを学習者に体験してもらおうことができるようになった。私達は日本語の学習支援だけでなく学習者同士の交流に加え、地域の日本人との交流もできる場を作つていきたいと考えている。

みんな地球人

3月の後期授業の最終日は雛祭り会と帰国する人のお別れの会の日でもある。手作りの修了証書と記念品を渡し、帰国する学習者からも一言挨拶をしてもらうのだが、あるベトナム人留学生がこんな挨拶をした。

「日本に来る前は中国のことをよく思つていませんでした。それは領海問題などが原因です。でもここで勉強するうちに考えが変わりました。和歌山で知り合った中国人はとても親切です。寮の隣室の中国人もいろいろ教えてくれます。私は中国人だから日本人だとかで偏見を持つのは間違いだとかわかりました。以前先生が話してくれた『私達はみんな同じ地球の仲間ですね。ここでは同じ地球で暮らす人間としてなかく勉強しましょう』という言葉を忘れません。これからは地球人として、将来、世界の平和のかけ橋になりたいです」

私はこの言葉を聞いて感動した。30年近く前に「小さな日中友好」と言った留学生の言葉を思い出し、私達もここで少しばかりではあるが世界の平和のお役に立っているのかもしれないと感じた。そして、困っている施設の子どもの学習支援にサツと温かい手を差し伸べられるE先生のように、これからも和歌山で生活する外国人の人達みんなの心がつながっていきけるよう、小さな活動ではあるが続けていきたい。